


海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	鈴木 隆晴	
所属機関	久留米大学医学部病理学講座	
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	15 th International Conference on Malignant Lymphoma (第15回国際悪性リンパ腫会議)	
渡航期間	自 2019年6月18日 至 2019年6月22日	
・研究内容 ・国際学会・会議内容	Clinicopathological differences of nodal PTCL with Tfh phenotype from AITL and PTCL, NOS, and detection of prognostic marker of nodal PTCL with Tfh phenotype	
<p>研究成果 (要約: 800字)</p> <p>私は新潟大学医学部血液内科に所属しておりますが、2017年6月から二年間、大学院の研究のため久留米大学医学部病理学講座に国内留学させていただきました。久留米大学医学部病理学講座では、Periheral T-cell lymphoma の臨床病理学的解析をテーマにして研究を行っておりました。この研究成果が 15th International Conference on Malignant Lymphoma (ICML) (第15回国際悪性リンパ腫会議)においてポスター発表で演題が採択されたため、2019年6月18日から6月22日の期間で参加させていただきました。ICMLは二年毎にスイス連邦ティチノ州ルガーノで開催され、悪性リンパ腫に関わる世界中の研究者の先生が参加されています。</p> <p>研究テーマである Nodal peripheral T-cell lymphoma with Tfh phenotype は WHO 分類 2017 において初めて記載された疾患であり、Angioimmunoblastic T-cell lymphoma と同様に T follicular helper (Tfh) cells 由来の腫瘍です。Tfh marker の陽性数などで PTCL, NOS と厳密に区別されるようになりました。そのため、Nodal peripheral T-cell lymphoma with Tfh phenotype に関する報告は現在までにほとんどありませんでした。今回の研究で Tfh marker の陽性率や bcl-6 陰性の症例は予後不良であることを明らかにしました。ポスター発表では現在までに報告されている AITL の遺伝子異常 (RhoA mutation (Gly17Val)) との関連が議論の中心になりました。今後は PTCL with Tfh-phenotype においてもゲノム異常や mRNA レベルでの研究が必要になると考えました。今後の研究の課題にしたいと考えています。</p> <p>今回の学会でこのような研究発表をできたことは、がん研究振興財団様からの御支援の賜物だと思っております。この場を借りて、心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。</p>		